

亡命者と遍歴職人がみた復古体制下ドイツの状況と変革への第一歩 —— パリの「ドイツ人民協会」の運動（1832－34年）

今井 晋哉

IMAI Shinya

徳島大学総合科学部 人間社会文化研究 第24巻

2016年

亡命者と遍歴職人がみた復古体制下ドイツの状況と変革への第一歩 —— パリの「ドイツ人民協会」の運動 (1832-34年)

今井 晋哉

はじめに

I 「ドイツ人民協会」の結成と組織・会員・活動の概要

II 「ドイツ人民協会」の運動の特徴—協会発行のパンフレットなどを通して

むすびにかえて

はじめに

1 本稿の課題・対象をめぐって

社会のなかで貧困の脅威にさらされ将来への展望が見出せないとき、あるいは政治参加への道が実質的に閉ざされ表現の自由や政治活動の自由も抑圧されているとき、そうした状況に抗議しこれを変えようとする人々はどのような手段をとりうるであろうか。

ここでとりあげたいのは、1830年代にパリに流れ込んださまざまな職業のドイツ人職人たちが、ドイツを追われあるいは逃れてきた自由主義・共和主義的な知識人と出会ってつくりはじめた組織的社会変革運動である。そこで目指されたのは、表現・集会・結社の自由など基本権の獲得、政治的民主主義の実現、社会経済的諸関係の変革を通じた職人層の境遇の改善ひいては社会の貧困問題の解決であったが、自由・民主主義の実現と社会経済関係の変革と、これらはそのどちらかが実現に向えばもう一方の課題も自動的に解決に向って動き出すという関係にはない。またたとえば経済的諸関係を社会主義的に変革する道が開かれるとして、そこで民主主義の課題がなおざりにされてよいわけではないだろう。

ここでとりあげる時代、異国の地で職業別職人組合の枠を超えて集結した職人たちにとっては、労使交渉の場が制度的に保証されているわけもなかった。また上記のような目標を掲げるパリやスイス各地などでのドイツ人の運動、あるいはフランスやイタリアの立憲自由主義・共和主義運動は秘密結社によるものが多かった。そのような場合、蜂起などの直接行動と啓蒙・宣伝活動とが主な運動の手段とされる。そのどちらに重点がおかれるかはその時々の政治情勢や運動組織の状態・指導的人物の考え方によるが、たとえ弾圧の危険と常に隣り合わせで細心の注意が必要な政治環境にあっても、変革運動が支持を広げ展望を切り開くには、対外宣伝と組織内の会員間の情報交流・討論の充実は重要な課題になるであろう。

運動の過程で、経済的諸関係の変革と民主主義の実現と、この二つのテーマはそれぞれどのように構想され、また両者の関係はどのように考えられていたであろうか。宣伝活動の実態および運動を担う会員間の情報交流・討議、さらにいえば共同学習過程の実状はどのようなものであったのか。ここでの筆者の関心は、こうした点をドイツ労働者運動の源流とも位置づけられる組織的運動の成立過程にさかのぼって再検討することにある。だが、冒頭からあまりに素

朴で散漫な書き出しとなってしまった。本稿の課題と対象をめぐる諸事情について、以下にもう少し詳しく説明してみよう。

本稿が対象とする、ドイツ人の自由主義・共和主義者と手工業職人との結合による組織的変革運動が成立したのは、ヨーロッパ史においてウィーン体制とも呼ばれる復古体制下にあった1830年代であった。

周知のとおり1815年以来の復古体制下のドイツにおいても、1815年から20年ごろにかけて学生や知識人に担われたドイツの「自由と統一」を求める運動が起こり、また1830年代に入るとフランス七月革命の影響も背景に、諸邦国における憲法制定・議会の権限の拡大、表現・言論の自由、集会・結社の自由、政治参加などを要求する運動が活発に展開される。30年代の運動は教養市民層を中心とするものだったが、ときに小商人層・手工業者層・農民層もそれらに加わった¹⁾。また、手工業職人が個別の職業ごとに職人組合の伝統に即して労働条件改善を求める運動（ストライキ・デモ・騒擾など）が、さまざまな都市で散発的に行われた²⁾。

一方、職人組合の伝統にもとづいた運動という性格を残しつつも、地域横断的且つ職業横断的な連帯・行動が、1830年代にパリ・スイスの諸都市・ブリュッセル・ロンドンなどで成立する。それらの運動は、伝統にもとづき、あるいは働き口の不足からやむをえず、遍歴途上にあった手工業職人たちが、政治目的をもつ集会・結社を許さない「ドイツ連邦」(Deutscher Bund)の弾圧措置によって追われた自由主義的・共和主義的・民主主義的傾向の亡命知識人と結びつくことによって始まった。この地域・職業横断的運動の成立を、ドイツ連邦共和国の近現代史家ヴォルフガング・シーダーはドイツ「労働者運動」の始原としたが、ドイツ労働者運動史の起原をめぐる諸見解のなかで一つの有力な見方となっている³⁾。

上記の諸都市のなかでもパリは、ドイツ人による労働者運動が最も早く創始され活発に展開された都市といってもよい。パリにおける1834年の「追放者同盟」(Bund der Geächteten)の結成、およそ1836年末から翌年9月にかけての「同盟」の分裂過程を経た「義人同盟」(Bund der Gerechten)の創設、そしてロンドンにおける1847年6月の「共産主義者同盟」(Bund der Kommunisten)の創設＝「義人同盟」の発展的解消という組織的変遷は、ドイツ労働者運動・社会主義運動の成立ないし初期の発展過程を反映するものとしてよく知られている。この過程は、マルクス主義にもとづく、あるいはそれに近い立場をとる歴史研究においては、運動が「小ブルジョワ民主主義」の影響から脱し、プロレタリアの階級意識と「科学的共産主義」が一体化したものへと発展していく過程として描かれることが多い⁴⁾。

以上の組織のうち「追放者同盟」は、ドイツ社会主義運動ないし労働者運動のルーツの一つと位置づけられることが多いわけだが、「同盟」は組織構造からみるとき中央集権的・絶対主義的秘密結社として知られる。規約によればそれは、上から「焦点」(Brennpunkt)→「郡野営地」(Kreislager)→「野営地」(Lager)→「テント」(Zelt)と称される四層から成るピラミッド型の組織で、各層は上位の階層に対して無条件で服従することとされていた。それどころか、最下層の基礎単位である「テント」の構成員(3-10名)には、「野営地」・「郡野営地」の存在すら知らされなかった。一方「同盟」の「最高立法・執行権」をもつ「焦点」の構成員は、同盟員のなかからこの層が独自に選抜し、下位三層のメンバーには完全に秘匿された。また各「テント」間・各「野営地」間の直接の水平的連絡・交流は厳格に禁じられていた。同盟員には同

盟の存在それ自体についての秘密厳守が義務づけられ、この点を含む「同盟」のさまざまな秘密の漏洩に対しては、名誉剥奪のほか死刑も規定されていた⁵⁾。

一方「同盟」は機関誌『追放者』(Der Geächtete)などにより公然たる宣伝活動を行っていた。同誌の発行部数はおよそ500部と推定され、フランス在住の同盟員に読まれたほか、スイスのドイツ人手工業者の協会にも少々流布したとされる⁶⁾。その主張の基調は、ドイツの封建的君主制を批判し民主主義的共和制社会の実現を目指すものとして知られているが、社会経済問題に対しては、民主主義的改良を進めていこうとする考えと財産共同体を求める社会主義的思想の萌芽とが並存していた。前者を代表する論者はヤーコプ・フェネダイ(1805-71年)、後者はテオドール・シュスター(1808年-没年不明)である⁷⁾。

だがこれも周知のことであろうが、「同盟」は1832年に結成された「ドイツ人民協会」(Deutscher Volksverein)を改組して発足したのであった。この「人民協会」こそは、パリ在住ドイツ人たちの設立した協会組織のうち、明確に政治的目的をもったものとしては初めてのものとされる⁸⁾。詳しくは以下のⅠでみるように、同協会ははじめ「自由な報道を支援するためのドイツ祖国協会」(Deutscher Vaterlandsverein zur Unterstützung der freien Presse)の支部として設立され、約半年後「ドイツ人民協会」へ改称・改組される(以下多くの場合、上記支部時代を含め「人民協会」と表記)。同協会は比較的単純な公然組織で、基本的には秘密結社ではなかった。会員は、西南ドイツを中心とする自由主義・共和主義の運動とつながりをもった知識人、そして商店員と遍歴手工業職人からなっていた。主な活動は、集会の場での討議、パンフレットの発行による宣伝、ドイツ内、とくに西南ドイツの自由主義者・共和主義者との連帯を目指したネットワークづくりであった。

「人民協会」も厳格な集権的秘密結社であった「追放者同盟」も、単一の社会思想にもとづく確立された路線の下に統制されていたのではなかった⁹⁾。これら草創期の結社の刊行物などを、現状認識・運動の目標・その実現に向けての方法論などに着目しながら再読し、冒頭にふれたように経済的諸関係の変革と民主主義の実現とはどのように構想され、同時に、組織内外に対する啓蒙・宣伝、情報交流はどのように行われていたのかという点から運動史を再検討すること。本稿はその一環であり準備ノートである。具体的には、「追放者同盟」の再検討は次の機会に行うとして、さしあたり本稿では前身の「人民協会」の2年間を対象とし、とくに運動の目標・方法、他のグループとの関係、組織形態などにみられる特徴について、叙述と考察を試みる。

2 先行研究について

ここでは「人民協会」をどのようにとりあげているかという点を中心に、先行研究を簡潔に紹介する¹⁰⁾。ただし「人民協会」の活動実態、とくに協会発行のパンフレットに表れた主張などに関する先行研究の叙述や評価については、必要な限り本稿Ⅱで改めて言及する。

まず、古いものではあるがマルクス主義歴史学の名著として知られるフランツ・メーリングの『ドイツ社会民主主義史』は、「追放者同盟」についてはフェネダイとシュスターの比較を中心に数頁を割いて論じているが、「人民協会」のことは、わずかに「南ドイツ権力に反対する新開を支援する公然」組織としているだけである¹¹⁾。

次に旧ドイツ民主共和国の研究についてみると、カール・オーバーマンが、最も先駆的に「人民協会」をとりあげ、スパイの報告や協会発行のパンフレットのの一部などを用いながら叙述している¹²⁾。ヴェルナー・コヴァルスキーは、みずから編集した史料集の序文で、かなりのスペースを割いて詳細に論じている¹³⁾。両者とも、協会内で手工業職人が次第に主導的な役割を果たすようになった点を強調している。「共産主義者同盟」史料集は、序文の叙述・収録史料ともに基本的に 1836 年から始まっており、「義人同盟」結成につながる「追放者同盟」の分裂過程については、小ブルジョワの指導部に対する進歩的な手工業職人たち（プロレタリア勢力）の組織的・政治的・イデオロギー的自立過程として言及されるものの、「人民協会」についてはまったく触れられない¹⁴⁾。

一方ドイツ連邦共和国では、ヴォルフガング・シーダーの研究が、この分野の先駆的な業績である。およそ 1832 年からの 10 年間にドイツ人によって諸外国で結成された労働者協会の動向を丹念に叙述・分析した著書のなかで、「人民協会」についても、その結成から「追放者同盟」への継承の過程・主な会員のプロフィールと彼らを取りまく社会経済的状況・他の運動組織との関係などについてかなり詳細に叙述している¹⁵⁾。その後エルンスト・シュレーブラーも 1848 年革命後までを視野に入れつつ、草創期のドイツ人手工業者・労働者組織の運動史についても要を得た概説を提示している。ただし「人民協会」についての叙述はごくわずかで、目新しい点はみられない¹⁶⁾。またハンス＝ヨアヒム・ルック＝ヘーベルレが、まさにパリのドイツ人手工業職人の諸結社が 1830 年代に発行したパンフレットを集めて編纂した史料集の序文において、「人民協会」についても、その成立過程、西南ドイツやフランスの自由主義・共和主義運動との関係、パンフレット発行をめぐる諸事情などを中心に、研究史に対する評価も交えながら比較的詳しく叙述している¹⁷⁾。

また再統一後のドイツにおいては、民主共和国出身のヴァルトラウト・ザイデル＝ヘブナーが、「追放者同盟」・「義人同盟」について改めて論じた論考（ヨアヒム・ヘブナーとの共著）のなかで、「人民協会」についてもコンパクトに要約している¹⁸⁾。

日本の先学の労作に目を移すと、良知力が、初期マルクス研究の重要な一環として、ヴィルヘルム・ヴァイトリング（1808－71 年）の活動と「義人同盟」の運動史にカール・マルクス（1818－83 年）とフリードリヒ・エンゲルス（1820－95 年）の動向も絡ませながら 1848 年革命に至る戦略論争史を描いた著書のなかで、また石塚正英が、絶対主義ドイツを民主主義的に変革しようとする勢力の二潮流、すなわち 1830/40 年代の青年ヘーゲル派の共和主義と「義人同盟」の共産主義に関する社会思想史研究のなかで、さらに加藤哲郎も注 5) に挙げた著書において、それぞれ「追放者同盟」をとりあげ、その分裂と「義人同盟」結成についても論及している。これらの著作の問題設定や内容からは学ぶところが多いが、それぞれそのテーマ設定に沿った構成をとっているため不自然ではないものの、「追放者同盟」の前身の結社までは、詳細には論じていない¹⁹⁾。また 1848 年革命前後の時期のフランス在住ドイツ人に関する的場昭弘の研究は、フランス側の史料・文献も用いて、在仏ドイツ人結社の一覧を示すとともに背景となるフランスのドイツ人社会について詳述しており、数々の示唆を与えてくれる。だがドイツ人諸結社の組織や活動内容の詳細な分析を主題としてはいない²⁰⁾。

では、「人民協会」の主張するところを読み解く前にまずⅠで、協会の結成過程・組織・主な会員とその活動・会員の構成などにつき、先行研究および若干の同時代史料に依拠しながら概観しておきたい。

Ⅰ 「ドイツ人民協会」の結成と組織・会員・活動の概要

1 結成の経緯・組織・主な会員とその活動

直接のきっかけは、1832年1月29日に西南ドイツのラインプファルツ地方で自由主義的民衆運動のなかから「自由な報道を支援するためのドイツ祖国協会」（以下「報道=祖国協会」）が設立されたことだった。ナポレオンの支配下でフランス法が施行されたプファルツ地方は、1815年にバイエルン王国領となっても、ミュンヘンの政府およびドイツ連邦の復古的政策に対抗する自由主義的知識人が多数集まり活発に言論・報道活動を展開する一つの拠点となっていた。協会員から集める会費によって、君主体制の復古的政治に対抗する新聞数紙の普及を支援すること、これが協会結成の主な目的であった²¹⁾。

結成直後の1832年2月3日に創設者の1人で法律家・ジャーナリスト・歴史著述家のヨハン・ゲオルク・アウグスト・ヴィルト（1798－1848年）が、機関紙『ドイチュ・トリビューネ』に同協会の地方支部結成を求める記事を發表すると、これが西南ドイツの多くの都市、そしてパリ在住のドイツ人の中で共感を呼ぶことになる²²⁾。以後協会はバーデン大公国やヘッセン＝ダルムシュタット大公国など他邦国にもまたがって110を超える支部を擁するまでに拡大し、会員数は教養市民層から手工業者・小商人・農民までを含む約5,000人を数えた。こうした支持を背景に協会は、雑誌・新聞の発行、集会の開催や請願活動を通して、言論・報道の自由から全ドイツのための民主共和制的憲法の制定までを要求し、公論の形成に大きな役割を果たした。同年5月27日から30日までプファルツの古城ハンバッハで開催された大規模な民衆祭典も、この協会の企画によるものであった²³⁾。

パリでは1832年2月末、若い商人たち・文筆家などの亡命者・手工業職人からなる在住ドイツ人が準備集会を開き、1830年から存続していたドイツ人合唱団を改組して「報道=祖国協会」の支部を設立した。会員になるにはパリの街のそこかしこに掲示されたリストに署名し、各自収入に応じた一定の会費を納めるだけでよいとされた。準備集会で暫定全権代表4名が選ばれ、32年3月5日の第1回公式集会では指導部を構成する委員10名が選出された。もともとその2週間後には市区ごとの組織へと、つまりより分権的な方向に組織が再編されている²⁴⁾。

1832年8月の初め頃、上記支部は「ドイツ人民協会」へと改称される。「報道=祖国協会」の支部として存在する根拠が失われてしまったからである²⁵⁾。上述のハンバッハ祭は、「ドイツ人の国民的祝祭」と銘打たれ、ドイツ各邦から2万人とも3万人ともいわれる広範な民衆各層が集まる一大集会となった。そこではドイツの「自由と統一」のほか、人民主権や共和制の樹立・下層民の窮状からの救済・諸民族の解放・ヨーロッパの民主的連帯などが高らかに謳われた。これに狼狽したオーストリアの宰相クレメンス・ヴェンツェル・ロタール・フォン・メッテルニヒ（1773－1859年）は同年6月末から7月初旬にかけて、ドイツ連邦議會を促して一連の弾圧措置を決議させた。それにより政治目的を有する一切の協会や集会は禁止され、「報道=祖国協会」の幹部を含むプファルツの自由主義者・共和主義者の多くは亡命を余儀なくされる

か、逮捕され有罪判決を受けることになった。また検閲が強化されるとともに、プファルツとバーデンの自由主義的新聞諸紙は全面的に弾圧を受けたのである²⁶⁾。

改称を機に「ドイツ人民協会」はより堅固な組織となった。指導部は正副の会長およびその他の委員によって構成された。1832年当時のフランス結社法は、20名を超える会員を有する全ての結社は官庁による認可を得なければならないと定めていた。逆にいうと、その点をクリアしないし回避すれば存続可能なのであった。この規定を回避するため、協会は20名未満の会員からなる、表面上独立した複数の部門によって構成されることとなった。各部門にも執行部（部門長・出納係）がおかれた。協会全体の指導部および各部門の執行部のメンバーは全員3ヶ月ごとに新たに選出された。また月に一度協会全体の会議が開かれた²⁷⁾。

協会結成時に中心的役割を果たしたのは、宝石・裁縫用品を商う商店の店員・訪問販売員であったヘルマン・ヴォルフム（1812-34年）とジャーナリストで語学教師のヨーゼフ・ハインリヒ・ガルニエ（1800年-没年不明）だった。ヴォルフムはバンベルク（バイエルン王国）で商業学校に通った後、ガルニエはハイデルベルク大学で文献学と神学を専攻し、フライブルク大学で短期間時事言語の教師を務めたあと、ともに1829年にパリにやって来たとされる²⁸⁾。

すでに1831年末に、弱冠19歳のヴォルフムは、ドイツ語話者の複数のフランス七月革命参加者と連絡をとりつつ、パリの商人仲間のあいだで政治的集会の組織に着手する。同時に約2-300人の若い商人仲間とともに、七月革命に心をひかれ1830年からパリに住んでいた作家ルートヴィヒ・ベルネ（1786-1837年）に、バーデンとバイエルンのラントシュテンデ（領邦議会への出席資格をもつ諸身分）に宛てた上申文の執筆を依頼している。当時、ベルネによるドイツについての辛辣な状況描写は、パリのドイツ人のあいだで大きな共感を得ていたと言われる²⁹⁾。また、後でもみるようにヴォルフム自身、協会への加入を呼びかける文書に署名者の1人としてたびたび登場する。その後32年8月末から33年1月にかけて、「人民協会」の委託を受けて、自由主義・共和主義運動のグループとのつながりをつくるべく西南ドイツに赴いている。33年7月、七月革命3周年に合せて騒乱が予想されるとしてフランス内務省が国内の政治結社の指導者たちを一斉に逮捕した時、ヴォルフムもフランスの共和主義結社「人および市民の権利協会」（*Société des Droits de l'Homme et du Citoyen*）パリ支部に関係の深い結社の弁士として逮捕され、同年8月に国外追放となった。翌34年2月、ヴォルフムは重い病を抱え滞在先のブリュッセルからパリに戻るも、政治活動を再開することなく4月に死去したとされる³⁰⁾。

一方ガルニエは1832年2月、学生時代からの知り合いの弁護士ヨーゼフ・ザヴォイエ（1802-69年）に説得されて、結成時から「人民協会」に加わる。「報道=祖国協会」の創設メンバーだったザヴォイエは同月、同協会の委任により宣伝目的でパリにやって来ており、「人民協会」の結成準備集会でスピーチもしている³¹⁾。こうしたプファルツの急進的自由主義者とのコンタクトを背景に、ガルニエはほどなくパリのドイツ人のあいだで指導者の1人とみなされるようになり、「人民協会」の会長にも就いた。翌33年2月末、ガルニエはヴォルフムがつくりはじめた人的つながりを深化させる目的で南ドイツに旅立つが、4月にカールスルーエ（バーデン）で逮捕されてしまう。同年10月フランスへの逃亡に成功するが、フランス当局によってアルザスのヴァイセンブルクを滞在地として指定され、パリに戻って来ることはできなかった。翌34年初め、彼はロンドンへ渡る³²⁾。

「人民協会」結成後ベルネもまた、商店員や手工業職人とともに政治的活動を行うことの意義を認め、1832-33年に協会の弁士として積極的に活動に関わったとされる³³⁾。

その後1833年の末ごろには、元ゲッティンゲン大学私講師で法学者のシュスターとやはり同大学私講師で法哲学者のハインリヒ・アーレンス（1808-74年）が、ガルニエが逮捕されヴォルフムが国外追放となったのちの「人民協会」で指導部に加わった。彼らは1831年1月8日にゲッティンゲンで小規模な反乱を主導する。背景には学問の自由の制約をめぐる法学部長との争いがあったとされる。この反乱がハノーファー軍に鎮圧されたのち両名ともドイツからの逃亡を余儀なくされ、シュスターはブリュッセル・ストラスブールなどを経て32年6月ごろ、アーレンスもベルギー経由で、パリに流れ着いた³⁴⁾。

また「追放者同盟」においてシュスターとならんで、理論面での指導者と目されたフェネダイも1833年末、パリに到着後まもなく「人民協会」に加入したとみられる。だが翌年「同盟」結成に参加するまでは、とくに目立つ言動は知られていない³⁵⁾。

以上のように、「人民協会」には若い商店員と学者・文筆家などの知識層が参加していた。結成準備集会で選ばれた暫定全権代表とは、ヴォルフム、彼と同じ商店で訪問販売員をしていたゲオルク・ライブハイマー、ガルニエ、それにウィーン出身の労働者とされるヨハン・カルグルの4名であった。また第1回公式集会で選出された委員会のメンバーは、この4名にドイツの君主体制を舌鋒鋭く批判していたベルネとハインリヒ・ハイネ（1797-1856年）両名、ハンブルク出身の居酒屋の主人クレーガー、それにウヴリエ、ベルク、モスクワ出身のプレヒシュミットという名の人物を加えた10名である³⁶⁾。

他方手工業職人も、結成当初から多数参加していた。ドイツ手工業者の集う食堂やカフェーには、1831年からラインプファルツの自由主義的な新聞各紙が置かれており、「報道=祖国協会」の支部結成を求めるヴィルトの呼びかけも、直接彼らに届いたという³⁷⁾。また1833年末になると、「人民協会」の指導部は手工業者が多数を占めたとされる。この時期に指導部を構成した委員として知られるのは、上述のシュスター、アーレンス、それにマイアー博士と呼ばれる人物のほか、マインツ（ヘッセン=ダルムシュタット）出身で仕立親方としてパリで開業していたヨハン・シューマッハー、バーデン出身の石版印刷職人ウルバーン・ムシャニ、ハノーファー出身の機械工コンラート・ノイパー、ヒルデスハイム（ハノーファー王国）出身の植字工ユリウス・ゴルトシュミットである³⁸⁾。

2 会員をとりまく状況について

続いてここで、参考までに当時のパリ在住のドイツ人について少々数字を挙げてみよう。パリのドイツ人人口については、同時代（1835-48年）の諸報告においても2万人から10万人と、数字が大きく異なる。その原因を含めこの問題をさまざまな角度から詳細に検討した的場は、当時のパリのドイツ人人口についてフランスの史料を駆使して本格的に検証した研究者のなかで、シーダーの挙げる2万人から4万人、うち手工業職人は1万5,000人から2万人という検討値が最も支持できるのではないかとしている。ただしこの2万から4万というのは、同時代の推計値のなかでは最少のものがおそらく真相に最も近いだろうとシーダーがみた数字であり、彼自身は1830-48年の間3万人を超えるとは推量できないと指摘している³⁹⁾。一方ルックヘーベルレは、フランスの初期社会主義運動史家ジャック・グランジョンの研究を引用す

る形で、1830年代についてはドイツ人人口をより少なく見積もり、31年：6,700人、36年：1万5,500人という推計値を挙げている⁴⁰⁾。いずれにしてもドイツ人人口の多くを占めたのは手工業職人で、とくに仕立屋・製靴工・家具工が多かったとされる⁴¹⁾。

一方、協会のリストのようなものは残っていないし入退会の実状も把握できないのだが、協会の会員数について先行研究は、存続期間中平均的に約90人ほどと推定している⁴²⁾。上記Ⅰ－1でみたように「人民協会」の会員は主に三つの社会集団からなっていた。すなわち1)若い商店員、2)学者・文筆家などの知識層、3)手工業職人層である。ただその他に、上述のように居酒屋経営者、さらに軍事装備品工場の工場主の参加も確認されている⁴³⁾。そのうち手工業職人には、上述のように仕立屋・印刷工・植字工・機械工がいたほか製靴工・家具工も加入していた。が、特定の職業への偏りは確認できない⁴⁴⁾。いずれにせよ「人民協会」に関係した人々の出身地・階層・職業は、かなり多様であったことがわかる。

当時の手工業職人層の社会経済的状態について正確に知るには、職種・出身地・パリの職人世界などの点から個別具体的に捉える必要があるが、本稿では主題化できない。ここでは先行研究によって概観を示すにとどめる。それによれば、1830－40年代における下層人口の急増を背景とする労働力の供給過剰によって、あるいは業種によっては徐々にマニュファクチュア経営増大の影響も受けて、手工業においては親方として自立・定住できない職人が急速に増えた。彼らの多くは社会的上昇への展望をもてず、徐々に貧困化の脅威にさらされるようになっていった。また、19世紀初め以来ドイツ諸邦の政府は、賃金闘争や相互扶助活動においてあいかわらず存在感を示していた職人組合に対する抑圧を強めていった。多くの邦国でたとえば、扶助基金の自治が奪われ国家管理の下に移された。また遍歴職人は国家の管理する遍歴手帳の携行を義務づけられるようになった。このような抑圧策は必ずしも所期の成果を上げたわけではなかったが、職人層のあいだに、社会から排除・追放されたという感情が広がっていった⁴⁵⁾。

Ⅱ 「ドイツ人民協会」の運動の特徴―協会発行のパンフレットなどを通して

以上の、結成過程を含む「人民協会」についての概略的・外形的紹介を受けて、以下では協会構成員自身の主張するところに即して、彼らは当時のドイツの国家・社会・労働者層をとりまく現状をどのようにみていたか、あるべきドイツの国家・社会をどのようにイメージしていたか、その未来像の実現へ向けての運動をどのようにイメージしていたか、そのさいどの範囲の人々を、運動の呼びかけないしは連帯の対象と考えていたのか、というような点についてみていきたい。今回参照しえた史料は主に、「報道=祖国協会」パリ支部結成期に関わる『ドイチュ・トリビューネ』紙と協会自身が発行したパンフレット(Flugschriften des Deutschen Volksvereins)である。協会のパンフレットは現在入手可能なものとして8点の存在が知られている。結成1年後の1833年3月から34年1月にかけて刊行されたとみられるが、その時期が明記されていないものも多い。だがその内容や先行研究にもとづいて発行順に並べることは可能で、本稿の注ではその順番にアラビア数字を付して示す。なお個々の号に関するデータについてはそのつど注記する⁴⁶⁾。

1 現状認識

まず何よりも、フランクフルトのドイツ連邦議会が 1832 年 6 月 28 日の布告によってドイツの小邦国の憲法にもとづく諸権利を侵害し、その結果言論・報道の自由（*Preßfreiheit*）を、それを合法的に保持していたバーデンやラインバイエルンの住民からも奪ってしまったことを指摘し、具体的には第一に、「人民の意志の最も強力な機関紙」である『ドイチュ・トリビューネ』ほか数紙を発禁に追い込んだことを非難している⁴⁷⁾。

また「統一された偉大で自由なドイツの再生」のために働いた 3,000 人を超える人々が、いわゆる大衆を迷わす策動の廉で獄中で苦しんでいることを指摘している。具体的にはとくに、自由に反逆するバイエルン政府がハンバッハ祭参加者を裁判にかけ有罪としたことを批判し、また政治犯に対する同政府の無慈悲な振舞いを、具体例を挙げて強く非難している⁴⁸⁾。

経済状況については、節度をもって慎ましく暮す多数のドイツ人が貧困に苦しみ、また法的にも無権利状態におかれている現状、そのため多くの人々がアメリカに移住していく現状を、怒りをもって告発している。それは最も多くの重労働を行っている「労働者」（手工業者・工場労働者・農民）が最も貧しく不幸である一方、富裕層＝「怠け者」（工場主・地主・銀行家・資本家・諸侯・大臣・枢密顧問官）が最も贅沢に暮す倒錯した世界だと総括されている。こうした法外な所得格差・倒錯が生じている原因については、支配層の所得のための搾取・君主制官僚国家体制の下で徴収された税の分配の不平等の問題を指摘している。もっともそれ以上に踏み込んだ分析はみられない⁴⁹⁾。

また教育について、ドイツの人民がこれまでに受けてきた教育は、自由な考え方を圧殺し非政治的なことがらにのみ注意を向けさせるようなものだったと指摘している⁵⁰⁾。

一方ドイツ人民に対する数年来の野蛮な抑圧行為が人々の心情に影響を及ぼした結果、ドイツは圧政のくびきを払いのける時期に近づいているとしている⁵¹⁾。

2 運動の目標ないし未来像

1832 年 2 月の「報道=祖国協会」パリ支部結成当初は、ドイツの統一と自由、そして当然ながら何より言論・報道の自由の維持ないし実現が目標として掲げられている。加えてドイツ諸邦に代議制議会制度を、真に機能するものとして確立することが目標とされた⁵²⁾。

翌 33 年夏のパンフレットでは、自然権の擁護を打ち出している。この自然権には何より表現・報道の自由、そして能力を自由に養成し発揮する自由が含まれるとされた。さらに誰もが平等な権利を得られるような新たな憲法ないし国制の必要性を説いている⁵³⁾。

先行研究は、1833 年夏ごろまでは自由主義・立憲主義にもとづく主張が協会内の討論の基調をなしていたのに対し、同年秋以降、シュスターを中心に形成され同年末以降はフェネダイも加わった民主主義・共和主義派が反対の論陣を張るようになったとみている。またこの時期になると指導部の委員の多数は手工業者によって占められるようになっていたとされる⁵⁴⁾。

しかしヴォルフム・ガルニエ・ベルネは結成時から共和主義支持だったとされるし、結成 1 年後の 33 年春のパンフレットでも、「ウィーン体制」として知られる「独裁君主制連合」の打倒が掲げられていた⁵⁵⁾。ここで打倒後の国制・社会をどのようにイメージしていたのか定かではないが、論争が起こる前の協会内にも共和主義支持者はいたわけである。だが具体的な経緯に目を移すと、33 年 11 月 11 日に開かれた指導部の会議において、協会の基本となるべき政

治原理の宣言の採択をめぐって、初めて本格的な論争が起こったとされる。このとき指導部委員会の委員であったゴルツシュミットと副会長のムシャニは、協会は「人権宣言」のロベスピエール版（1793年）を、内容に変更を加えないでドイツ語に訳し、大量に印刷してドイツ各地に配布するべきだと求めたという⁵⁶⁾。続いて同年12月8日の総会では、諸民族の自由の実現にとって自由主義的立憲君主制では不十分であること、ドイツには共和主義政体導入が必要であることを訴える意見が多数を占めた⁵⁷⁾。つまりこの間に、協会がよって立つべき基本原理について、一定の明確化・急進化がみられたとは言えるだろう。

3 運動の方法について

「報道=祖国協会」の支部として発足した時点で協会は、人民の立場に立った諸新聞がドイツの隅々にいきわたるようにしなければならないとし、会員に対し各自の力の及ぶ限り自由主義的新聞の普及・発送に貢献するよう求めている⁵⁸⁾。

またドイツの人民が受けてきた教育の欠陥を改善し、人間の尊厳や自然権を第一に考察しなければならないと訴えている。そしてドイツの人民が真に救済され、もはや一握りの陰謀家に隷属することがないようにするには、人々のあいだになお残る先入観を根絶やしにしなければならない、民衆啓蒙こそが重要だと指摘する⁵⁹⁾。

さらに、パリ在住のドイツ人の多くは祖国の地を離れてからドイツに関する報道に全くないし不十分にしか接しておらず、現在ドイツ中が苦しんでいるような圧迫を感じることはないために、現地の悲劇的な状況を少しずつ忘れつつあるだろうという認識を示し、それゆえ協会としてときおり小冊子を発行しドイツの状態を描写することにしている。そして、パリにいる同胞の幸福のためにドイツ諸邦で弾圧に苦しんでいる人々への連帯と共闘を呼びかけるのである⁶⁰⁾。

全体的に、勇壮な調子でパリ在住ドイツ人に対して、諸侯による専制政治を打倒し祖国の屈辱を払いのけるための粘り強い闘いを呼びかける叙述が目につくのだが、それが具体的に意味するのは、つまるところ協会への参加と団結ということであり、上述の通り教育・啓蒙や情報提供が重視されていた⁶¹⁾。

4 運動のナショナルな性格、他の運動・結社との関係あるいは運動の国際性について

協会が運動への参加を呼びかける対象は、あくまで第一にドイツ人同胞であることは明らかである。結成期の集会の場で「バイエルン人・バーデン人・ヘッセン人等々としてではなく、一度ドイツ人として」集まろうという声が上がったこともあった。国際連帯という以前に、まずもって「ドイツ人」としてのナショナルな結びつきが、なお未達成の課題なのであった。そういう背景もあってか、全体的にドイツへの、いまだ統一と自由を手にしていないドイツへの「祖国愛」というものが随所に感じとれる。協会員はみずからしばしば「祖国の友」と称し、また宣伝・呼びかけ文には「世界の他のすべての国々よりはるかに進んだドイツの文明と文化が当然手にすべき自由」というような言い回しが散見される⁶²⁾。

同時にその一方で、「すべてのヨーロッパ列強の卑怯な裏切りの支配下にある」「勇敢な」ポーランドの人々に激励と連帯のメッセージが送られている。またポーランド人のための献金が呼びかけられ、実際結成期の集会に参加していた2名のポーランド人に、集まった献金が手渡

された例もある。逆に「自らも貧困と闘わねばならない高潔なポーランド人たち」ならびにイタリア人・スペイン人から協会に寄付がなされた例もある。これについてヴォルフムらは、問題なのはひとりドイツの再生だけではなくヨーロッパの再生なのだからとコメントしている。またやはり貧困のため兵士にならざるをえなかったセザールという名のフランス人から月々の会費納入の申し出を受けたという例も報告されている。これはドイツの協会なのだと彼に言う、「言論の自由を擁護するとき、私もまた1人のドイツ人なんですよ」と答えたという⁶³⁾。

また、他国民の反体制運動との共同行動の例を少々挙げると、1832年5月21日にパリ郊外のブローニュの森でマリ・ジョゼフ・ラ・ファイエット侯爵(1757-1834年)を主催代表とする五月祭が催されたさい、これに「人民協会」会員を含むドイツ人450人、さらにフランス人・ポーランド人・イタリア人・スペイン人が参加したとされる。ラ・ファイエット起草の「人権宣言」のドイツ語訳が読み上げられ、「ラ・マルセイエーズ」や「ドイツ・パトリオートの歌」が歌われたという⁶⁴⁾。また協会が結成1周年にあたる1833年2月24日に催した祝宴について伝える報告によれば、同じ飲食店で前年の5月27日、すなわちハンバッハ祭の開幕日にパリで初のドイツ人民の祭典(Volksfest)を行うために協会が開いた宴会に、ヨーロッパ各国から人民の友(ポーランド人・フランス人)が招かれたという。なおラ・ファイエットはこの宴会にも主宰者として参加している。祝宴では「ドイツの自由のために」と同時に「すべての民族の統一のために」乾杯の辞が述べられた⁶⁵⁾。

その他、協会員を含むパンフレットの読者の士気を鼓舞するために、君主権力の軍隊に対しヨーロッパのほぼすべての民族は、自由を得ようと同様に懸命に努力しているのだから同盟軍に属しているのだと言ったり⁶⁶⁾、たとえばギリシア独立戦争(1821-29年)やロシア領ポーランドにおけるロシア専制権力に対する蜂起に共感を示しつつ、それらに対しドイツ人が資金面でも人的にも支援を惜しまなかったことを称賛するというような記述もみられる⁶⁷⁾。

以上では協会の宣伝媒体に表れた主張についてみてきたが、続けて先行研究にも依拠しつつ、なおいくつかの点を追記しておく。

5 分派活動

1832年2月の結成から約1年後の33年の初めに、実はガルニエ(ジャーナリスト)のイニシアティヴで「人民協会」内に「贖罪同盟」(Sühnbund)と称する秘密政治結社が結成されている。ガルニエ以外に結成に加わったのは8人の手工業職人で、判明しているのはムシャニ(印刷工)・ノイバー(機械工)・ゴルトシュミット(植字工)、それにフリードリヒ・クリストフ・ベッカーという仕立工である⁶⁸⁾。

「贖罪同盟」の組織実態や活動内容は、残念ながら明らかではないのだが、ガルニエは結成にあたり晩年のラ・ファイエットおよびフランスの「シャルボヌリ」(Charbonnerie)の指導層と協議していたという。この「シャルボヌリ」は1820年ごろイタリアの「カルボナリ」がイタリア人亡命者を通じて移植されたもので、20年代初頭には全国で推定3万人もの加入者を獲得したとされる。1822年2月にラ・ファイエットらも関与した蜂起を準備したが失敗に終わり、組織は解体していったが、20年代末からフィリップ・ブオナッローティ(1761-1837年)が中心となって立直しを図り、フランス政府の復古的政策の打倒などを目指して、1832年6月に「改

革派シャルボヌリ」(Charbonnerie reformée)を結成していた⁶⁹⁾。ガルニエと「シャルボヌリ」との協議によって組織間の提携につながるような具体的な成果は得られなかったとされるし、この間の経緯の詳細については不明だが、後の「追放者同盟」の組織形態に対し「カルボナリ」・「シャルボヌリ」の影響が色濃く及んでいる点は、つとに知られているところである⁷⁰⁾。

6 1834年1月－5月の経過

1834年の1月ないし2月に「人民協会」は、ドイツ語版「人および市民の権利宣言」なる文書を刊行する。これはⅡ－2でふれた、前年11月11日の会議でゴルトシュミットとムシャニが「人権宣言」(ロベスピエール版)のドイツ語版の作成とドイツ各地への配布を求めたことを受けてのものだった。実際に作成されたドイツ語版は、上述の共和主義結社「人および市民の権利協会」の指導者の1人でブオナッローティの盟友でもあったシャルル・アントワヌ・テスト(1782－1848年)が編集した「社会の基本原則の宣言」という文書をもとにしており、ロベスピエール版および採択された1793年憲法の一部をなす人権宣言の両方からなっていた⁷¹⁾。

ほぼ同時期の34年3月にフランス結社法が改定され、これを直接の契機に「人民協会」は改組されることになる。新たな結社法では、会員数20名以下のものを含むあらゆる結社について、当局の事前認可が必須となった。これに対し「人および市民の権利協会」パリ支部が武装蜂起し新結社法を阻止しようとしたが、同年4月蜂起は軍事的に鎮圧され同協会自身が壊滅的打撃を蒙る結果となった。これを受けて「人民協会」の幹部たちは5月初めに協議し、協会存続は秘密結社の形態をとる以外には不可能であること、秘密結社として活動を継続していくことを確認した。この方針が同5月11日の「人民協会」最後の総会で承認されたとみられる⁷²⁾。

「人民協会」の会員のなかには、秘密結社への参加を躊躇するものも多かったようだが、最後の協会長であったムシャニの尽力により一定数の会員が新組織に移行したとされる。こうして結成された「追放者同盟」において理論面での指導者とみなされるのは、上述のようにフェネダイとシュスターであったが、シューマッハー・ムシャニ・ノイバー・ゴルトシュミットら手工業者もまた、新「同盟」内で引続き指導的役割を果たすことになる⁷³⁾。

以上のように、秘密結社「追放者同盟」の結成は直接的には上述の外部環境の変化によるものだったが、一方で少なくとも何人かの結成メンバーは、すでに「贖罪同盟」を通じ秘密結社を経験し、フランスの共和主義秘密結社とも接触していたのである。

以上本稿では、対象を「人民協会」の約2年間の活動に限定し、協会発行のパンフレットを中心に、その他若干の史料を用いて叙述してきたが、指導的メンバー個々人の関わりや影響力については十分には明らかにできなかった。また「人民協会」や「追放者同盟」とパリのフランス人を中心とする共和主義的結社との関係、1833年秋ごろからの「人民協会」の一定の急進化と同年秋にパリで続発した大工・仕立工・製靴工・印刷工・パン職人などのスト⁷⁴⁾との関連について、かねてより示唆ないし問題提起されているところだが、思想史上の影響関係も含め、本稿では具体的に立ち入ることはできなかった。本稿で使用しえた史料・文献の範囲内で論及できなかったこれらの点については、「追放者同盟」成立史として、稿を改めて論じたい。

むすびにかえて

稿を閉じる前に本稿の範囲内で明らかになった「人民協会」の運動の特徴について、順に次の諸点をめぐって、まとめておきたい。すなわち 1) 現状認識・目指す変革の方向性、2) 一定の急進化と指導部の構成、3) ナショナルな性格と国際的連帯の側面、4) 組織形態・内部のコミュニケーション、5) 教育の意義、6) 職業横断的結合と「労働者」としての集合意識、の諸点に論及する。

1) について、「報道=祖国協会」パリ支部結成以来少なくとも 1833 年夏ごろまでは、Ⅱ－2 でもみたように「報道=祖国協会」を拠点にした知識層の自由主義・立憲主義にもとづく主張が、「人民協会」の論調を規定していたとみられる。あるいは階層横断型結社の端緒の時期でもあるためか、議論は素朴で焦点を絞り切れていない印象がある。

これに対し 33 年秋以降、協会内の討論は共和主義の方向に、一種先鋭化していったとみることができ、これを手工業者が指導部の多数を占めるようになったことと関連づける見方がある⁷⁵⁾。この 2) の点に関連して、たとえば「追放者同盟」の規約案（1834 年 5 月）には、新しい「同盟」に「加入できるのは手工業者または芸術家の階級に属する人々だけである」とする条項が含まれていた。ある仕立職人が、クラップロートという人物とガルニエはスパイであって学者連中は危険な存在になりうるとして、こういう条項を規約に入れることを迫ったのだという⁷⁶⁾。「人民協会」から「追放者同盟」に移行する時点で、手工業職人のあいだに亡命知識層に対する一定の反感が存在していたことは指摘できよう。

とても十分な情報とはいえないが、Ⅰ－1 で確認できた指導層の職業階層について、ここで改めて整理してみると、結成後第 1 回公式集会で選出された委員会のメンバーは、知識層 3 名・自営業 1 名・商店員 2 名・労働者 1 名・不詳 3 名であった。これに対し 1833 年末の指導部委員は、知識層 3 名・手工業親方 1 名・職人層 3 名であった。また、今回参照しえた史料のうち『ドイチュ・トリビューネ』紙の記事と手紙文（いずれも 1832 年 2 月末・3 月）は、『トリビューネ』64 号のものが協会名で出されたほかは、56 号のものはヴォルフムルのスピーチを収録したもので、それ以外はすべてヴォルフムル・ライブハイマー・カルグルの 3 名の連名によるものである。「労働者」カルグルの職種は明らかではないが、いずれにしても彼らは知識人ではない。知識層の助言を得た可能性は高いであろうし、ガルニエやベルネもさまざまな機会にスピーチを行ったであろうが、結成期の協会の対外宣伝を担ったのは決して知識人だけではなく、むしろ商店員と労働者が前面に立ったのである。一方、「贖罪同盟」の結成を主導したのはジャーナリストのガルニエであったこと、「追放者同盟」ではフェネダイやシュスターも指導的立場にあったことも考え合せると、「人民協会」の 2 年間の間に手工業職人の実質的関与の度が高まったことは確かであろうが、知識層主導の運動が手工業職人層との階層的対立を経て職人層主導へ移行したというように、図式的に整理するのには無理がある。ちなみに 20 歳前後で運動に積極的に参加したヴォルフムルが、早世することなく参加・成長し続ければ、商店員仲間の関わりも含めて、パリにおけるドイツ人結社の運動はどのように展開したであろうかという気もしなくもない。

次に 3) の点についてはⅡ－4・5・6 から、批判・変革の対象はあくまでドイツだったが、国際的連帯の側面をも併せもっていたことがわかる。シーダーは、ドイツの初期労働者運動は

1840年代も含めて本質的にナショナルな運動という性格を保持していたとしつつ、むしろその最も端緒の時期にこそ、同じような志をもった他国民のグループとの接触・連帯が最も集中的にみられたと評している。ちょうど本稿が対象とした「人民協会」の活動および「贖罪同盟」「追放者同盟」の結成過程がそれにあてはまる。1834年以降パリでは、こうした国際的交わりはみられなくなるとされるが、だとすればそれはなぜなのかという点も含め、この観点からも同年以後の経過は再検討に値するのではないだろうか⁷⁷⁾。

続いて4)の組織形態・組織内コミュニケーションについてみると、Ⅰ－1でみたように、とくに結成期の組織はオープンなものだったことがわかる。たとえば「報道=祖国協会」支部への加入呼びかけにさいしては、主なメンバー（ガルニエ・クレガー・ベルネ・ハイネ）の名を挙げ、彼らの組織への献身について紹介されている。また加入申込みのための署名リストは公開されていた⁷⁸⁾。

協会内の議論は、結成時以来いわゆるフロアからの発言を含めて、かなり活発に行われていたようである。たとえばパンフレット7・8号の筆者と目されるゴルトシュミットとシュトレールが、1833年秋に協会の集会でそれぞれ用意してきた論説を読み上げる機会があったが、スパイであったクラブロートの報告によれば、これらの論説の印刷をめぐる激しい議論が戦わされ、両名に対して支持する声と非難とが寄せられたという。最終的に両方の原稿とも編集委員会に委ねられ、編集作業を経て印刷されることになったようである。なおこの委員会には執筆者也出席する機会があった⁷⁹⁾。また1833年12月8日の総会で自由主義的立憲君主制の是非やドイツへの共和主義政体導入をめぐる議論になったさいも、討論は全体的に非常に激しいものになり、自由への裏切り者には絞首刑を、という声もあがったという⁸⁰⁾。このように討論は常に冷静に行われたわけではないようだが、秘密結社という形態をとらざるをえなくなる前の、会員総数100名を出ない程度の結社であったことも幸いしたのであるだろうか、指導部の選出方法などを含め「人民協会」は、全体的に開放型・参加型の民主的結社であったと言える。

このように多様な職業・階層に属する人々が、個人として自由意思にもとづいて参加する「協会」(Verein)という組織形態は、この後市民層の組織ばかりでなく、ドイツ内外のドイツ人労働者協会の組織形態として広まっていった。同時にしかし、こうした公然活動だけでは不十分と判断されたのであろうか、分派としての秘密結社「贖罪同盟」の結成に至ったのだったが。

5)の教育・民衆啓蒙の重要性についても、協会はいくどか訴えているが、何らかの教育プログラムについて具体的に提案されてはいない。

6)職業横断的結合と「労働者」としての集合意識の成立という点について、シーダーは、1830年代にドイツ外部の諸都市で手工業職人たちが亡命知識人の自由・平等思想に接し活動をとにもするなかで、同業組合の枠を超えた職業横断的な連帯・行動、そしてそれを通じて境遇・立場を共有する者＝「労働者」としての集合意識が成立したとみている⁸¹⁾。「人民協会」の2年間に関する公表文書においても、たしかにすでに結成時のヴォルフム・ライプハイマー・カルグルの連名による呼びかけ文が「パリ在住のドイツ人労働者へ」という表題になっており、注目される場所である⁸²⁾。一方、Ⅱ－1でみたように勤勉で貧困な「労働者」(Arbeiter)は、「富裕層」(Reiche)＝「無為に過ごす怠け者」(Müssiggänger)と対置されるという素朴な図式で規定されている。この場合具体的には「手工業者・工場労働者・農民」が念頭にあると

みられ、個別の職業の枠を超えてはいるが逆にきわめて幅広く、階層的仲間意識・プロレタリア的階級意識というところまで自覚されていたかどうかは疑わしい⁸³⁾。

本稿で参照しえた文書をみる限り、たとえば復古体制下ドイツにおける圧制に対する呪詛やドイツ人民に対する鼓舞にみられるように、全体的に激烈で勇壮な言い回しが目につく。協会員の訴えはいずれも真摯なものであるし、宣伝媒体という性質上自然なことかもしれない。また協会内の討論の内容について不明な点も多いのだが、一方で運動の目標・運動方針・将来展望などについて、社会経済問題については目指すべき未来像も、具体性に欠けると言わざるを得ない。だが今回とりあげたのは、地域・職業・階層横断的な運動の端緒の2年間のことであり、さまざまな曖昧さも、なおそれだけ多様な可能性を孕んでいたことの表れとみることもできるであろう。いずれにせよこの「人民協会」の運動を通じて提示された諸論点は、その後の労働者運動・民主主義運動の推移を考察するにあたり、いずれも等閑視できないポイントであろう。

¹⁾ さしあたり参照、Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd. II: *Von der Reformära bis zur industriellen und politischen „Deutschen Doppelrevolution“ 1815-1848/49*, 2. Aufl., München 1989, S. 322-369, 413-457; Helmut Reinalter, “Die frühe liberale und demokratische Bewegung in Deutschland und Österreich 1815-1848/49 (Einführung)”, in: idem (Hg.), *Die Anfänge des Liberalismus und der Demokratie in Deutschland und Österreich 1830-1848/49*, Frankfurt am Main/Berlin/Bern/Bruxelles/New York/Oxford/Wien 2002, S. 9-19; 末川清「ウィーン体制下の政治と経済」成瀬治／山田欣吾／木村靖二（編）『世界歴史大系 ドイツ史 2 —1648年～1890年—』山川出版社、1996年、228-233, 242-254頁。

²⁾ さしあたり参照、Dieter Dowe, “Einleitung”, in: idem, *Bibliographie zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, sozialistischen und kommunistischen Bewegung von den Anfängen bis 1863, unter Berücksichtigung der politischen, wirtschaftlichen und sozialen Rahmenbedingungen*, 3., wesentl. erw. u. verb. Aufl., Bonn 1981, S. 29, 41. またたとえば参照、Angelika Voss-Louis, *Hamburgs Arbeiterbewegung im Wandel der Gesellschaft. Eine Chronik*, Bd. 1: *1842-1890*, Hamburg 1987, S. 9-11.

³⁾ Cf. Wolfgang Schieder, *Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung. Die Auslandsvereine im Jahrzehnt nach der Julirevolution von 1830*, Stuttgart 1963, S. 9f., 82ff.; Dowe, “Einleitung”, S. 29, 42.

⁴⁾ たとえば参照、*Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, Bd. I: *1836-1849*, hrsg. v. Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands u. v. Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Kommunistischen Partei der Sowjetunion, Berlin-DDR 1970, “Einleitung”, S. 5-30. なお本稿では組織の名称には「 」を付けることとする。

⁵⁾ Cf. *Statuten des Bundes der Geächteten („Berg“- oder „Lager“-Statuten)*, in: *Vom Kleinbürgerlichen Demokratismus zum Kommunismus. Zeitschriften aus der Frühzeit der deutschen Arbeiterbewegung (1834-1847)*, bearb. u. eingel. v. Werner Kowalski, Berlin-DDR 1967, S. 975-982, 1165f.; *Statuten des Bundes der Geächteten („Allgemeine“ Statuten)*, in: *ibid.*, S. 982-985, 1167; Schieder, *Anfänge*, S. 25-27; 良知力『マルクスと批判者群像』平凡社、1971年、19-20頁; 石塚正英『三月前期の急進主義—青年ヘーゲル派と義人同盟に関する社会思想史的研究』長崎出版、1983年、181-182, 189-191頁; 加藤哲郎『社会主義と組織原理 I』窓社、1989年、47-51頁。

⁶⁾ 良知力（編）『資料 ドイツ初期社会主義—義人同盟とヘーゲル左派—』平凡社、1974年、4頁。

⁷⁾ さしあたり参照、Jakob Venedey, “Die Propaganda”, in: *Vom Kleinbürgerlichen Demokratismus zum Kom-*

munismus, S. 15-24; Theodor Schuster, “Gedanken eines Republikaners”, in: *ibid.*, S. 48-84. またこれらの論説の邦訳が良知（編）『資料』に収められている（ただしシュスターのものは部分訳）。編者による解説とともに参照，ヤーコブ・フェネダイ（松岡晋訳）「プロパガンダ」良知（編）『資料』4-12 頁；テオドル・シュスター（松岡晋訳）「ある共和主義者の思想」同書 13-31 頁。なおシュスター，フェネダイのプロフィールについては本文のほか，注 34) と 35) に記す。

⁸⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 14.

⁹⁾ この点，「人民協会」についてⅡ以下で検討する。なお「追放者同盟」の組織原理を加藤哲郎は，注 5) の著書でオーギュスト・ブランキの指導していた秘密結社と共通する「陰謀的集権」型と呼び，かたやロバート・オーウェンの「ニュー・ハーモニー」を典型とする組織を「友愛的平等」型とし，この 2 類型を分析の手がかりに「民主主義的中央集権制」の問題性を主題として，19 世紀ヨーロッパ社会主義運動の組織原理を歴史的に検討している。

¹⁰⁾ 以下，本節（はじめに－2）で言及する先行研究の文献データ表示においては，ここでの紹介・言及に直接関係する箇所のみを示す。

¹¹⁾ Franz Mehring, *Gesammelte Schriften*, hrsg. v. Thomas Höhle/Hans Koch/Josef Schleifstein, Bd. I, Berlin-DDR 1960, S. 90-99. —邦訳：フランツ・メーリング（足利末男／野村修／林功三／平井俊彦訳）『ドイツ社会民主主義史』上巻，ミネルヴァ書房，1968 年，71-78 頁。

¹²⁾ Karl Obermann, “Zur Frühgeschichte der deutschen Arbeiterbewegung (1833-1836)”, in: Fritz Klein/Joachim Streisand (Hg.), *Beiträge zum neuen Gschichtsbild. Zum 60. Geburtstag von Alfred Meusel*, Berlin-DDR 1956, S. 201-205.

¹³⁾ Werner Kowalski, *Vorgeschichte und Entstehung der Bundes der Gerechten*, Berlin-DDR 1962, S. 41-59.

¹⁴⁾ *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, Bd. I, S. 9-12.

¹⁵⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 14-28 u. passim. 「追放者同盟」の分裂と「義人同盟」結成については，ドイツ民主共和国の研究者のとる見方には否定的で，秘密のヴェールに包まれ組織の全権を掌握する権威主義的な指導部に対する一部の一般会員の抗議に原因を求める見解を支持している。

¹⁶⁾ Ernst Schraepler, *Handwerkerbünde und Arbeitervereine 1830-1853. Die politische Tätigkeit deutscher Sozialisten von Wilhelm Weitling bis Karl Marx*, Berlin/New York 1972, S. 40f.

¹⁷⁾ Hans-Joachim Ruckhäberle, “Einleitung”, in: idem (Hg.), *Frühproletarische Literatur. Die Flugschriften der deutschen Handwerksgehilfenvereine in Paris 1832-1839*, Kronberg/Ts. 1977, S. 9-18, 22-27, 30-41, 55f.

¹⁸⁾ Joachim Höppner/Waltraud Seidel-Höppner, “Der Bund der Geächteten und der Bund der Gerechtigkeit”, in: Helmut Reinalter (Hg.), *Politische Vereine, Gesellschaften und Parteien in Zentraleuropa 1815-1848/49*, Frankfurt am Mein 2005, S. 93-97.

¹⁹⁾ 良知『マルクスと批判者群像』8-28 頁；石塚『三月前期の急進主義』1-6, 177-192 頁；加藤『社会主義と組織原理Ⅰ』47-52 頁。また，石塚正英氏の長年にわたるヴァイトリング研究を氏みずから再編集した最新著もあわせて参照，同『革命職人ヴァイトリングーコミュンからアソシエーションへ』社会評論社，2016 年，40-52 頁。

²⁰⁾ 的場昭弘『フランスの中のドイツ人—1848 年革命前後の移民、亡命者、遍歴職人と社会主義運動—』御茶の水書房，1995 年，73-161, 290-316 頁。

²¹⁾ Cornelia Foerster, “Der Preß- und Vaterlandsverein von 1832/33. Zur politischen Kultur des Vormärz”, in: Reinalter (Hg.), *Politische Vereine*, S. 201-203; 末川「ウィーン体制」245 頁；村上俊介『市民社会と協会運動—交差する 1848/49 年革命研究と市民社会論—』御茶の水書房，2003 年，126-131 頁。

²²⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 14. ヨハン・ゲオルク・アウグスト・ヴィルトは，ハレ大学で法学博士の学位を取り法律事務所でも働いたのち，1831 年からミュンヘンでジャーナリストとして活動を始める。複数の雑誌のほか立憲主義の立場に立つ急進的の日刊紙『ドイチェ・トリビューネ』紙の編集に携わった。

そのため罰金・拘禁などの弾圧を受け、同年 11 月報道規制の緩やかなラインブファルツに同紙発行拠点を移した。Cf. Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 93; 村上『市民社会』129 頁; Ernst Rudolf Huber, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789*, Bd. II: *Der Kampf um Einheit und Freiheit 1830 bis 1850*, 3., wesentl. überarb. Aufl., Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1988, S. 137f. なお『トリビューネ』には「祖国の再生のために」という副題が付されている。

なお本稿に登場する主な人物の伝記的データについては、きわめて著名な人物を除き、本文中に記すこと以外で本稿の内容に関係する必要最小限のことを注に記すことにする。

- ²³⁾ Foerster, “Der Preß- und Vaterlandsverein”, S. 203-211; 末川「ウィーン体制」245-246 頁; 村上『市民社会』122-126, 131-135 頁。
- ²⁴⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 14; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 13; *Deutsche Tribüne*, 54, 1832. 2. 29.; 64, 1832. 3. 14.; L. Fr. Ilse, *Geschichte der politischen Untersuchungen, welche durch die neben der Bundesversammlung errichteten Commissionen, der Central-Untersuchungs-Commission zu Mainz und der Bundes-Central-Behörde zu Frankfurt in den Jahren 1819 bis 1827 und 1833 bis 1842 geführt sind*, Frankfurt am Main 1860, S. 448.
- ²⁵⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 15.
- ²⁶⁾ ハンバッハ祭およびその後の「ドイツ連邦」による弾圧措置について参照, Huber, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789*, Bd. II, S. 139-149; Foerster, “Der Preß- und Vaterlandsverein”, S. 211-215; 末川「ウィーン体制」245-247 頁; 村上『市民社会』123-128, 137-138 頁。
- ²⁷⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 14f; Ilse, *Geschichte der politischen Untersuchungen*, S. 449; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 26; Carl Georg Ludwig Wermuth/Wilhelm Stieber, *Die Communisten-Verschwörungen des neunzehnten Jahrhunderts*, Erster Theil, Berlin 1853, S. 10f.
- ²⁸⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 15; Karl Glossy (Hg.), *Literarische Geheimberichte aus dem Vormärz*, Wien 1912, Anmerkungen, S. 18.
- ²⁹⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 15; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 12. もっともここで触れた政治集会や上申文の内容は不明である。ルートヴィヒ・ベルネについては参照, Huber, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789*, Bd. II, S. 129; John Breuilly/Wieland Sachse, *Joachim Friedrich Martens (1806-1877) und die Deutsche Arbeiterbewegung*, Göttingen 1984, S. 27.
- ³⁰⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 15f.; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 25; idem (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 70.
- ³¹⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 16; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 14, 75. ヨーゼフ・ザヴォイエは、ハイデルベルク大学とヴュルツブルク大学で学生生活を送り、1823 年からツヴァイブリュッケン（ラインブファルツ）で弁護士業を営む。32 年 6 月パリに亡命し、以後「人民協会」および「追放者同盟」で活動する。34 年からは語学教師・ジャーナリストとして生計を立てた。Cf. Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 89; Helmut Reinalter/Claus Oberhauser (Hg.), *Biographisches Lexikon der demokratischen und liberalen Bewegungen in Mitteleuropa 1770 bis 1848/49*, Frankfurt am Main 2015, S. 365.
- ³²⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 16f.; Reinalter/Oberhauser (Hg.), *Biographisches Lexikon*, S. 161.
- ³³⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 18; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 12f.
- ³⁴⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 17; Reinalter/Oberhauser (Hg.), *Biographisches Lexikon*, S. 4, 395. テオドル・シュスターは、ハイデルベルクとゲッティンゲンでの法学生時代はブルシェンシャフトのメンバーとしてアクティブに活動していた。22 歳の若さでゲッティンゲン大学法学部で教授資格を取得し私講師を務めたが、パリでは医学の勉強を始め、博士号も取得した。Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 17; Reinalter/Oberhauser (Hg.), *Biographisches Lexikon*, S. 395. ハインリヒ・アーレンスも、ゲッティンゲンでの法学生時代にブルシェンシャフトに属していた。Cf. *ibid.*, S. 3f.
- ³⁵⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 21. ヤーコブ・フェネダイも、ボンとハイデルベルクでの法学生時代はブルシェ

ンシャフトのメンバーであった。1827年から父親の弁護士事務所で働いていたが、32年5月にはプファルツでハンバッハ祭に参加しヴィルトらの急進的ジャーナリストのグループに加わる。その後同年9月に逮捕されたが、この未決監から脱獄し33年4月、フランスに逃げ込んだのである。最初の滞在地ナンシーでは5月27日にハンバッハ祭記念祭を主催したとされる。そして同年12月、滞在許可を取得してパリに移った。Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 20f.; Reinalter/Oberhauser (Hg.), *Biographisches Lexikon*, S. 437; Wermuth/Stieber, *Die Communisten-Verschwörungen*, Zweiter Theil, Berlin 1854, S. 131.

- ³⁶⁾ Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 13; idem (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 70; *Deutsche Tribüne*, 64, 1832. 3. 14. ヴォルフムは1833年7月の逮捕時まで、ガルニエは同年2月に南ドイツへ旅立つまで、指導部委員会の委員であった。ハイネは、七月革命後1831年にパリに移住していた。クレーガーは七月革命の参加者であった。この他、ツヴァイブリュッケンの「報道=祖国協会」の本部との間の財務関係業務の処理に銀行家が協力している。Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 13, 16. *Deutsche Tribüne*, 61, 1832. 3. 7.; Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter in Paris”, in: *ibid.*, 69, 1832. 3. 19.
- ³⁷⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 18. この呼びかけはフランス語の新聞にも掲載されたという。その他『ドイチェ・トリビューネ』の複数の記事のフランス語訳を、ザヴォイエがパリに持参している。これはフランスの共和主義運動との関係構築に一役買ったとされる。なお上述クレーガーの居酒屋も、「人民協会」第1回集会を含めドイツ人手工業者の集会が開かれる場所の一つであった。Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 13, 15, 24; 的場『フランスの中のドイツ人』102頁。
- ³⁸⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 18f.; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 25. シューマッハーは1833年夏から10月まで、ムシャニは34年2月から5月まで、それぞれ協会長の地位にあった。Cf. Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 44. また1834年1月パリ発のあるスパイ報告によれば、ノイバーは協会の「出納長」でありドイツとの通信網を保持していた。Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 19.
- ³⁹⁾ Cf. 的場『フランスの中のドイツ人』110–131頁; Schieder, *Anfänge*, S. 97-101.
- ⁴⁰⁾ Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 12.
- ⁴¹⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 99; Schraepler, *Handwerkerbünde*, S. 40f.; 的場『フランスの中のドイツ人』133頁。
- ⁴²⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 118f.
- ⁴³⁾ Cf. Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter”, in: *Deutsche Tribüne*, 69, 1832. 3. 19.
- ⁴⁴⁾ Cf. Hermann Wolfrum/Georg Leipheimer/Johann Kargl, “Briefe aus Paris”, in: Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 79; *ibid.*, S. 96.
- ⁴⁵⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 84-89; Schraepler, *Handwerkerbünde*, S. 18-21.
- ⁴⁶⁾ パンフレットの入手にあたっては、ラインラント・プファルツ州の図書館(Pfälzische Landesbibliothek, 在シュバイヤー)にたいへんお世話になった。筆者が現物のコピーを依頼したところ、ただちにデジタル化されたデータへのアクセスの便宜を図ってくださった。その意味でここにURLを示すべきかもしれないが、実はそのすべてがルックヘーベルレ編の史料集(注17)に、また2点がコヴァルスキー編の史料集(注13)に、などと(ドイツ活字体から今日のラテン字体に改めて)収録されてもいるため、省略する。
- ⁴⁷⁾ Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter”, in: *Deutsche Tribüne*, 69, 1832. 3. 19.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 4, S. 1. この第4号にタイトルは付いていない。1833年8月発行。発行主体についての記載はない。
- ⁴⁸⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 4, S. 1; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 3, S. 1. 第3号にタイトルは付いていない。発行時期・発行主体ともに明記されていない。だがヴィルトらに有罪判決が下されたこの裁判は1833年7月29日から数日間行われたことから、この号は判決について知らされた直後の時期、すなわち33年8月に発行されたとみられる。なおこの裁判ではザヴォイエら計

13名が起訴されていたが、ヴィルトらは国家・政府の転覆の要求、ザヴォイエらは同じく転覆の陰謀が理由とされた。Cf. Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 89.

⁴⁹⁾ Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter”, in: *Deutsche Tribüne*, 69, 1832. 3. 19.; Obermann, “Zur Frühgeschichte”, S. 204; Höppner/Seidel-Höppner, “Der Bund der Geächteten”, S. 94f.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 5, S. 1f.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 7, S. 2f.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 8, S. 1, 4. 第5号にタイトルは付いていない。1833年8月発行。発行主体は「ドイツのパトリオーティッシュな人民協会」とされている。第7号は、タイトルというのではないが、冒頭に「兄弟たち・友人たちへ!」と大書されている。1833年11月発行。発行主体は「ドイツ人民協会」となっている。第8号も、同様に冒頭に「兄弟たち・友人たちへ!」と大書されている。1834年1月発行。発行主体は「ドイツ人民協会」とされている。なおパンフレット7号・8号の筆者について、先行研究はゴルトシュミットとゾロトゥルン（スイス）出身の家具工（ピアノ製造）ヴォルフガング・シュトレールの2名ではないか、あるいはさらに数名が関わっているかもしれないとしている。Cf. Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 107; Schieder, *Anfänge*, S. 179.

⁵⁰⁾ Obermann, “Zur Frühgeschichte”, S. 203; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 2, S. 1. 第2号にタイトルは付いていない。1833年7月発行。発行主体は「ドイツのパトリオーティッシュな人民協会」と明記されている。

⁵¹⁾ *Ibid.*, 2, S. 2.

⁵²⁾ *Deutsche Tribüne*, 54, 1832. 2. 29.; Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter”, in: *ibid.*, 69, 1832. 3. 19.; Schieder, *Anfänge*, S. 177.

⁵³⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 2, S. 1f.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 3, S. 2.

⁵⁴⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 18; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 44.

⁵⁵⁾ Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 15f.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 1, S. 3. 第1号にタイトルは付いていない。発行時期・発行主体ともに明記されていない。だが先行研究は1833年3月から5月の間に発行されたとしている。Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 337; Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 83.

⁵⁶⁾ Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17, 40; Schieder, *Anfänge*, S. 182; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 45, 50. ここでいうロベスピエール版とは、1793年にマクシミリアン・ロベスピエール（1758–94年）が国民公会に提出したものの採択はされなかったテキストを指している。

⁵⁷⁾ Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 47.

⁵⁸⁾ *Deutsche Tribüne*, 54, 1832. 2. 29.; Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter”, in: *ibid.*, 69, 1832. 3. 19.

⁵⁹⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 2, S. 1f.; Obermann, “Zur Frühgeschichte”, S. 203f.

⁶⁰⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 2, S. 1; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 6, S. 2. 第6号も、タイトルではないが、冒頭に「ドイツ人へ!」と大書されている。1833年9月5日付。発行主体として、「ドイツ人民協会の名において」4名の指導部委員（シューマッハー・ノイパー・ムシャニ・ゴルトシュミット）の名が記されている。

⁶¹⁾ Cf. Wolfrum/Kargl/Leipheimer, “An die deutschen Arbeiter”, in: *Deutsche Tribüne*, 69, 1832. 3. 19.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 5, S. 2f. ちなみに1833年10月の協会の集会ではパンフレット2000部を配布する地域と対象（階層）について討議された。Cf. Obermann, “Zur Frühgeschichte”, S. 204.

⁶²⁾ Cf. *Deutsche Tribüne*, 54, 1832. 2. 29.; 56, 1832. 3. 2.; 64, 1832. 3. 14.; *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 1, S. 1.

⁶³⁾ *Deutsche Tribüne*, 56, 1832. 3. 2.; 64, 1832. 3. 14.; Wolfrum/Leipheimer/Kargl, “Briefe aus Paris”, in: Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 79. この手紙も1832年3月付である。ちょうど32年1月

から3月にかけては、ロシア領ポーランドにおける1830-31年の対露蜂起が弾圧され、亡命者となった約1万人に上るポーランド人（貴族層）が、たとえばプファルツ経由でパリに向っている時期でもあった。参照、早坂真理「分割と蜂起の時代」伊東孝之／井内敏夫／中井和夫（編）『新版世界各国史 20 ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年、189-200頁；村上『市民社会』130頁。

⁶⁴⁾ Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 16; Ilse, *Geschichte der politischen Untersuchungen*, S. 449.

⁶⁵⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 1, S. 1; Schieder, *Anfänge*, S. 158. ラ・ファイエットは、とりわけ七月王政に反対の立場をとるようになって以来、亡命者のあいだで、いわば1789年の理念を肉体化した保護者として、非常に名声があったとされる。Cf. *ibid.*

⁶⁶⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 3, S. 2.

⁶⁷⁾ *Flugschriften des Deutschen Volksvereins*, 6, S. 1.

⁶⁸⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 24; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 58.

⁶⁹⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 23f.; 上垣豊「立憲王政」柴田三千雄／樺山紘一／福井憲彦（編）『世界歴史大系 フランス史 2 —16世紀～19世紀なかば—』山川出版社、1996年、460頁。ブオナッローティは、フランス革命期に総裁政府に対するパブーフの陰謀に加わって流刑となったあとジュネーヴに移ったが、七月革命でパリに戻っていた。

⁷⁰⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 24-27; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17; Schraepler, *Handwerkerbünde*, S. 42f.; 石塚『三月前期の急進主義』181-182頁。

⁷¹⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 181ff.; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 40. 「人および市民の権利協会」は、労働生産物の公平な分配・累進課税など社会的な要求もとりいれ、パリだけでも3,000人の会員を擁しており、主に熟練労働者によって構成されていたとされる。参照、上垣豊「立憲王政」467-468頁；Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 49.

⁷²⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 19; Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17f.; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 56f.

⁷³⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 19f., 23f.

⁷⁴⁾ さしあたり参照、谷川稔『フランス社会運動史—アソシアシオンとサンディカリズム』山川出版社、1983年、35-51頁；Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 48ff.

⁷⁵⁾ Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17. またコヴァルスキーは、この時期以降手工業職人が協会内の討議を主導していった点を強調している。Cf. Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 44ff.

⁷⁶⁾ Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 18, 26; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 58. この条項は結局採用されなかったのだが、後にクラブロートは実際にプロイセン政府のスパイだったことが判明した。Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 18, 26.

⁷⁷⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 157-159.

⁷⁸⁾ *Deutsche Tribüne*, 54, 1832. 2. 29.

⁷⁹⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 179; Ruckhäberle (Hg.), *Frühproletarische Literatur*, S. 107; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 51.

⁸⁰⁾ Cf. Ruckhäberle, “Einleitung”, S. 17; Kowalski, *Vorgeschichte*, S. 47, 51.

⁸¹⁾ Schieder, *Anfänge*, S. 82ff.

⁸²⁾ 注36)などに挙げた『トリビューネ』69号の記事。

⁸³⁾ Cf. Schieder, *Anfänge*, S. 179.